

| | | | |
|---------------|------------------------------|---------|---------|
| 氏名 | 内 藤 正 之 | | |
| 学 位 の 種 類 | 医 学 博 士 | | |
| 学 位 授 与 番 号 | 乙 第 1744 号 | | |
| 学 位 授 与 の 日 付 | 昭和62年 3 月31日 | | |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当） | | |
| 学 位 論 文 題 目 | マウス奇形耳の骨・軟骨染色法による形態病理学的研究 | | |
| 論 文 審 査 委 員 | 教授 村上宅郎 | 教授 栗井通泰 | 教授 赤木忠厚 |

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

伝音系奇形に対して聴力改善手術を成功させるためには、各症例の奇形病態を正しく理解、把握することが必要で、特に耳小骨の形態観察は重要である。

耳小骨奇形の病態を明らかにする目的で、実験的に ddN 系マウスおよび Wistar 系ラットを用いて、ビタミン A 過剰投与によって得られたマウスおよびラット胎仔の聴器病態を骨・軟骨染色法による骨格標本として、実体顕微鏡下に観察した。

その結果、マウス、ラット両者ともメッケル氏軟骨およびツチ骨では、ほとんどの例で正常であった。一方、キヌタ骨、アブミ骨およびライヘルト氏軟骨では、大多数において異常をみとめた。また、この 3 者の異常は同時に合併する傾向が顕著であった。本実験の結果から、キヌタ骨は発生由来上、アブミ骨との関連性が大であり、キヌタ骨の大部分が第 2 鰓弓性起源の可能性が考えられた。また、ツチ骨はメッケル氏軟骨と発生由来についての関連性がきわめて大きいと考えられた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究はビタミン A 過剰投与によって得られたマウスとラット胎仔を実体顕微鏡下に観察したものであるが、従来十分知られていなかった耳小骨の奇形について重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。